

夕夕夕
織田昭子

マ
ダ
ム

マダム



1956年11月30日 第1版刊行
1957年1月20日 第23版刊行

著者 織田昭子
お だ あき こ

刊行者 竹内寛子

定価 250円
地方価 260円

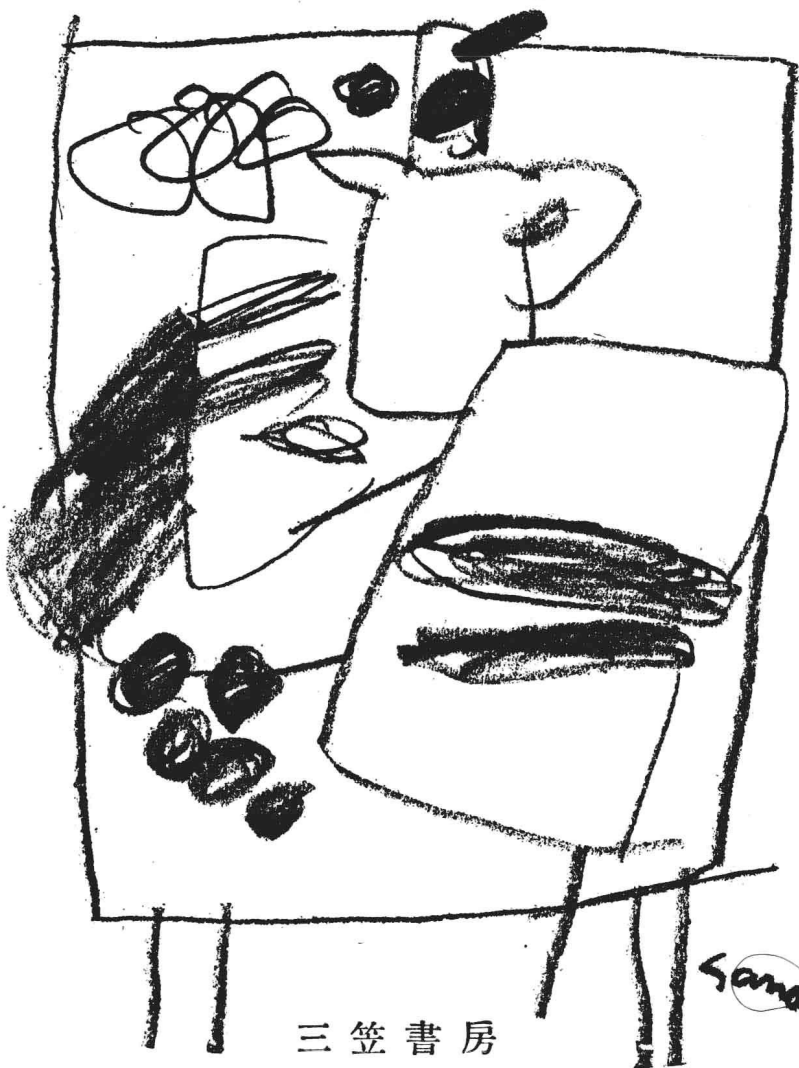
株式会社 三笠書房

東京都千代田区神田神保町二丁目
電話九段區 6504 振替東京 22096
7483

© Akiko Oda, 1956. Printed in Japan

堀内印刷・徳住製本

マダカ 織田昭子



三笠書房

Same

目次

わが生活と意見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

マダム・女房の比較論

バアは浮気の診療所

浮気考現学

銀座型輕恋愛について

女房業失格のこと

道頓堀時代とおせいさんのこと

マダム入門

再びおせいさんのこと

わが名はマダム・・・・・・・・・・・・・・・・・・

新宿という街

おんなの悲しみ

れんげのマダム

マダム族の生息

マダムは泣く

女給版「あなた買います」

当代女給氣質・・・・・・・・・・・・・・・・・・

女給という職業

サービス技術のA・B・C

戦後女給のドライ性

忘れ得ぬ女給たち

忘れ得ぬ人びと・・・・・・・・・・・・・・105

木挽町界隈

直木三十五のこと

かけだし女優時代

武田麟太郎氏のこと

太宰治氏と坂口安吾氏

屋根裏の作家

姦婦の生涯

菊池寛先生と煙草

織田作の思い出

末期の情婦

マダム昨今・・・・・・・・・・・・・・121

真夜中のラーメン

銀座の伊達男

女給の歌

呑ん兵衛分類説

マダムと大臣

気圧変化

マダムの願い

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・

わが生活と意見

マダム・女房の比較論

男性の遊び場の管理人マダム族は、家庭の管理人女房族に常に敵対視されている。女房業がいつも亭主の足音を待つように、わたしたちマダム業も夜々客である男性の足音を待ちつつけている。生活を共にする夫を待つか、酒の場を共にする客を待つか、いずれも待つのは女性で、待たれるのは男性である。

一般に酒場やキャバレーは、浮気やアバンチュールのチャンスが多いものと考えられがちであるが、浮気のチャンスは、かえつて街や、会社や、電車の中や、劇場や、どこにでも——たとえば家庭の中にも、ごくあたりまえの日常生活の中にそのチャンスは多いのだ。

ましてマダム族の八割までは女房業の経験があり、現に女房業兼業のマダム族も多い。

マダムはクベコの火をつける。風が吹こうと、車の中だろうと、たいへん上手につける。火

をつけるときうつむく者、胸のかげでマッチをする者、てのひらで押える者、暗がりの中にパッと明るむ胸や、顔や、形のいい手が十分計算され、明るい店のマダムより、暗い店のマダムのほうが火のつけ方をねばるのは、より効果的だからだ。

くねった腰の振りかたも、やんちゃな言葉使いも冷たい沈黙をまもるのも、すべて一度計算づくで出てきた態度なのだ。カマトトぶりも、悪女ぶりも、文学少女ぶりも、すべて酒場でのふりごとなのである。全的にふりごとを奨励する店、50%限度とする店、虚七実三を良しとする店、それぞれ店の性格によつて決められるだけなのである。

一ト皮むけば生活という現実的なものが齒をむいているのであつて、淑女サロンも、未亡人サロンも、アルバイト・サロンも、それぞれ淑女ぶり、シロウトぶりである間だけ商売になるのだ。ほんものズバリの孤獨、品行方正の未亡人を集めれば、たちまち營業に破綻を來たすのである。

未亡人サロンなどという呼びかけは、「経験者です、お高くとまりません」という皮肉だし、アルバイト・サロンは、「シロウトなのよ。そんなに高くないわ」で、どちらも結局はセミ・プロである。つまり六〇%プロであることをうたいあげているわけになる。

酒場は、紙と木の家屋の多い日本の国に必然的に案出された社交場である。家庭をサロン化できない非社交性と、自身サロンを持ちたくとも持てない貧しさが生んだもので、適當の商用の場であり、休息の場であるわけだ。

男性は家庭がつまらないから遊ぶのではなく、家庭にない要素を取入れるために酒場に現われる。壁も薄く、カギもない家庭の中で、文学が論じられ、商取引が行われたとしたら、子供はきき耳を立て、女房は追いまくられ、家庭はたちまち修羅場に一変する。職業の場のすさまじさを直接家庭へ送りこまないためにベアや飲み屋で一ト息入れるわけで、多くの職業人が解放され、酒をくみかわし、往々、酒友という男性的愛情が発生し、まず危険な恋愛のベチルスの入りこむすきはほとんどない。

かえつてベチルスに侵されかかった男性が現われれば、恐ろしい天然痘をたちまち注射で、ただ十文字のメス型におさめてしまつたように、氣のきいたおしやべりや、ダンスのリズムで初期に燃焼させ、結晶作用を起させないように散らしてしまふだけである。

元来男性は自己中心的で、決して享樂人種ではなく、女のように身を売つてダイヤを得ようとか、ナイロン・ブラウスのためにデイトしようというような精神は全然持ち合せていないと

思う。

酒場に現われるのは、つまり時間切れが可能な気の重くならないものを求めるからだ。飲み過ぎる、飲み過ぎないの献身的監視もなく、途中で飲み残しても、「パパ、もつたいない」などと言われないこと、つまり亭主諸公は金で酒場内のあらゆる自由を買っているからである。

バアは浮気の診療所

きょうも夕方銀座を歩いていると、六尺近い大学生が三人、

「金がないとつまらねえ街だなあ銀座は……」

と大声で嘆き合つて通り過ぎた。たしかにメインストリート銀座の欠点は、お金がないといささか興味索然とするところのようである。

しかしダンナさま方は財布の重みと享樂の楽しみとはほぼ同じくらいだと万般御承知の筈だ。支払つただけの享樂ないし効果を確実にあがなうことのできる、安全無害にして、信用の置ける場所、つまり馴染の酒場をいかに上手に利用するかがその腕の見せどころになるわけだ。

こうして日夜よそのダンナさま方に接していると、世のダンナ族が、いかにそれぞれ専属の女房族をこよなきものとしてつくしんでいるかがわたしにはよくわかる。もし会社で、タイピスト嬢の小指についた紅が、誤つてダンナさまのワイシャツを汚せば、「いや、かまいませんヨ」といつて、会社は飛びだしても、夕方酒場に現われれば、顔見知りの女給にそれをぬぐわせ、「女房に氣を使わせないからなあ」と照れてみせるだろう。わたしの店では、このために紅拭き用ベンジンが用意されてある。

妻子というものはダンナさまの心の中に厳然と密着しているので、それらを護るために本能的な浮気心や、必然的な恣心が発生すれば、にがい酒でみずから慰さめ、殺し、おさえつけ、時には香水や、ルージュや、ウイソクを注射薬と同じように使える腕利きの看護婦に治療させる。恋の最初のきつかけを、ごまかしてしまえば、治療間違いないことは、年来の経験で御存知なのだ。バアは浮気の診療所でもある。

女給はその看護婦で治療代としてささやかなチップをちようだいする職業人であつて、決して曖昧模糊におさつを取上げる恐るべき女ではない。

酒場は酒を売り、雰囲気を売り、女給はその字の通り女ウエーターで、美しい花であつても、

決してアバンチュールのために出てきているわけではなく、なによりもまず彼女らの真剣な生活の場なのである。

マダム業者は、社交技術の習練を必要とするが女房業熟練工というものは、結局生活技術の名人なのである。昔から、ままを炊いたり針仕事といわれる通り、庶民階級では、飯が炊けず、針仕事ができないというとは、なまじの稼ぎより致命的で、家庭生活の荒らされてくるのは、女房族の口紅の薄さや、つくろつた足袋ではなくて、家事運営技術の問題なのではないだろうか。女の下積みにも等しい、家事労働というものは、実は人生の重要な部分で、へたをすると、一生これだけにかまけて終つてしまうかもしれない。

男に多くを求めず、男に愛される女というものは、一人のダンナさまと一軒の家庭を通して人生を見ているのだけれど、男商売に明け暮れているわたしたちより、比較級を知らないだけ人を見る目が確かなのだと思う。

女は五十過ぎると、魔性を帯びるというけれど、町女房を四十年つづけた、わたしの母親は、時々連れて帰る、女給や、訪問客のことを、実地的確に表現する、決して巧んだのではなく、何気なくヒョイと話すのだが、呆れ返る位正確で、何故この人が自分の亭主だけ見損つたのか